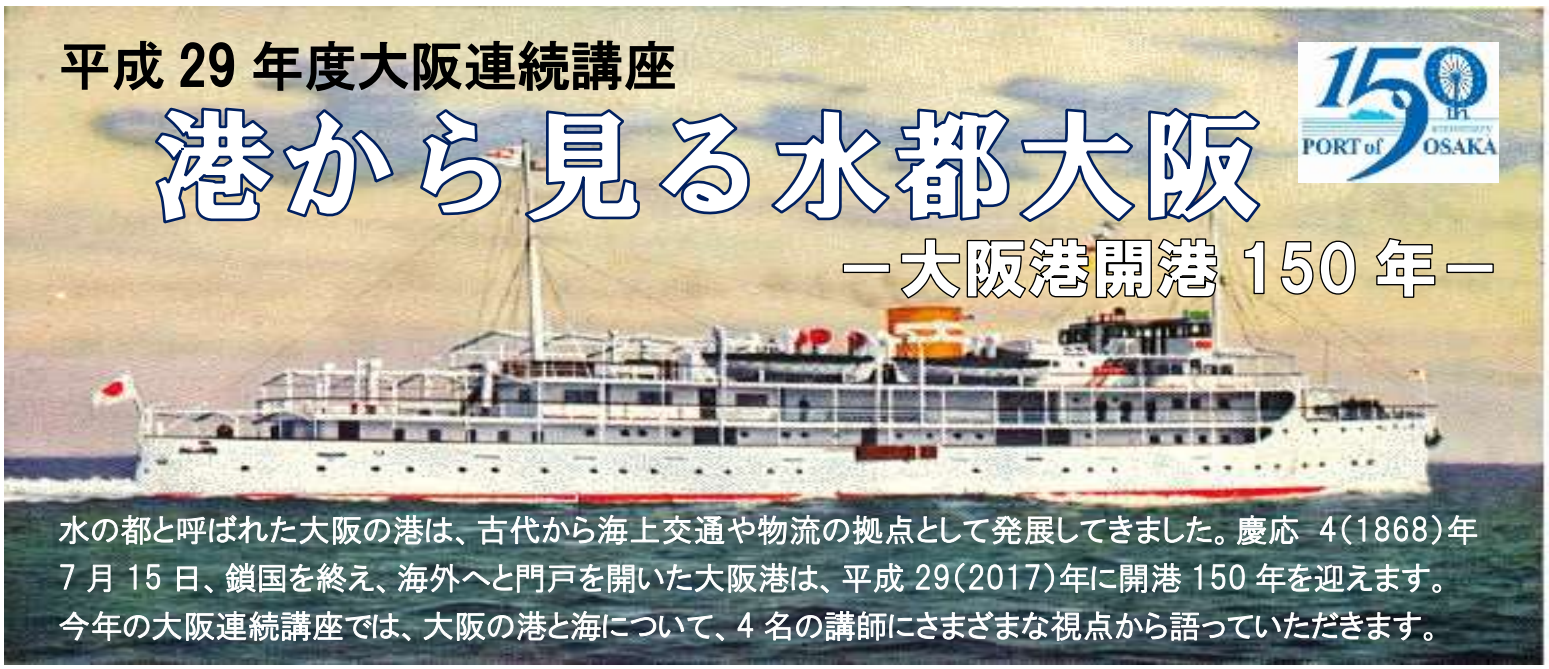

平成 29 年度大阪連続講座

港から見る水都大阪

―大阪港開港 150 年―

水の都と呼ばれた大阪の港は、古代から海上交通や物流の拠点として発展してきました。慶応 4(1868)年 7 月 15 日、鎖国を終え、海外へと門戸を開いた大阪港は、平成 29(2017)年に開港 150 年を迎えます。今年の大阪連続講座では、大阪の港と海について、4 名の講師にさまざまな視点から語っていただきます。

「阪神阿波連絡船 山水丸」([絵ハガキ帖]) 大阪市立図書館デジタルアーカイブより一部改変

7/8（土） 第 1 回 難波津から渡辺津へ

講師： 松尾信裕 氏（大阪歴史博物館 学芸員）

7/15(土) 第 2 回 海 創造のみなもと―古代人が見た難波の海―

講師： 村田正博 氏（大阪市立大学 名誉教授）

7/22(土) 第 3 回 水都大阪と近代建築

講師： 高岡伸一 氏（大阪市立大学 都市研究プラザ 特任講師）

7/29(土) 第 4 回 大阪湾の渚の自然

―大阪港ができる前、できた後、そして現在―

講師： 石田 惣 氏（大阪市立自然史博物館 学芸員）

- 時間 午後 2 時から 4 時（開場午後 1 時 30 分）
- 定員 各回 300 名 （当日先着順）
- 入場無料
- 会場
  大阪市立中央図書館 5 階大会議室

★手話通訳等ご希望の方は申込が必要です。

各回とも開催日の 3 週間前までに、お名前･ご連絡先･講座名を明記して、手話通訳等希望とお申込みください。（FAX06-6539-3335）

★地下鉄千日前線・長堀鶴見緑地線西長堀駅 7 番出口すぐ

▼ 主催･お問合わせ ▼

大阪市立中央図書館
大阪市西区北堀江 4-3-2 電話：06-6539-3302
http://www.oml.city.osaka.lg.jp

▼ 協賛 ： 大阪港開港 150 年記念事業推進委員会

第１回　7/8(土)　難波津から渡辺津へ

大阪は瀬戸内海の東端に位置していたため、古代以来、瀬戸内海を利用する海上交通と、近畿地方内部や東日本との陸上交通の中継地でした。大阪にあった港は古代の難波津から中世の渡辺津へと呼称を変えつつ維持されてきたことを発掘調査の成果や文献史料を基に検討し、その推定地を考えます。

松尾信裕 氏　(大阪歴史博物館 研究主幹 学芸員)

1973 年 大阪市中央区森の宮遺跡の発掘調査に参加。1976 年 立命館大学卒業。1976 年 4 月 難波宮跡調査会に勤務。1979 年 4 月 大阪市文化財協会に勤務(～2007 年 3 月)。2007 年 4 月 大阪市に勤務。大阪城天守閣館長に着任(～2014 年 3 月)。2014 年 4 月 大阪城天守閣を定年退官後、大阪歴史博物館に勤務。現在に至る。

第２回　7/15(土)　海 創造のみなもと―古代人が見た難波の海―

『古事記』『萬葉集』の伝承や倭歌には、海によって発想された、古代人の豊かな世界がとどめられています。大和の国に活動の中心を置いた彼等にとって、海と言えば、まずは難波の海でありました。この海をめぐる伝承や倭歌について考察することを通して、環境と人間、生命の神秘など、現代人の汲むべき意義をご一緒にさぐりたいと思います。

村田正博 氏　(大阪市立大学 名誉教授)

1980 年3月 筑波大学大学院博士課程文芸･言語研究科各国文学(日本文学)専攻単位修得退学。1980 年 4 月 天理大学文学部講師。1983 年4月 大阪市立大学文学部講師。1986 年 4 月 大阪市立大学文学部助教授。1998 年 12 月 文学(博士)の学位を取得。1999 年4月 大阪市立大学文学部教授。2001 年4月 大阪市立大大学院文学研究科教授。2016 年3月 大阪市立大学定年退職 名誉教授の称号を授与される。

第３回　7/22(土)　水都大阪と近代建築

大阪開港に伴って、大阪港周辺や安治川を上った川口周辺には、西洋に倣った近代建築が多く建てられました。現在も港や水辺に残る近代建築の歴史とその魅力をご紹介しながら、現在の活用の状況や、大阪における建築への関心の盛り上がりについてもお話ししたいと思います。

高岡伸一 氏　(大阪市立大学 都市研究プラザ 特任講師)

1970 年大阪生まれ。高岡伸一建築設計事務所主宰。大阪市立大学都市研究プラザ特任講師。大阪府立江之子島文化芸術創造センター･チーフディレクター。設計活動と並行しながら、大阪をフィールドに建築ストックを活用した都市再生や、クリエイターと協働した地域課題の解決などに取り組んでいる。2016 年に設立された「生きた建築ミュージアム大阪実行委員会」では事務局長を務める。主な著書に『生きた建築 大阪』(共著、2015)など。

第４回　7/29(土)　大阪湾の渚の自然―大阪港ができる前、できた後、そして現在―

今の大阪港のある姿からは想像もつきませんが、かつて湾奥には広大な干潟がありました。また、堺市から岬町までは砂浜が続いていました。都市としての近代化を経てすっかり埋め立てが進んでしまった大阪ですが、それでもなお、かろうじて残されている干潟や砂浜があり、生き物が暮らしています。大阪湾の原風景と変遷を、渚の自然から眺めてみましょう。

石田 惣 氏　(大阪市立自然史博物館 学芸員)

1973 年大阪市生まれ。福井市自然史博物館を経て、2006 年より大阪市立自然史博物館学芸員。担当は無脊椎動物(特に貝類)。

関連企画

Webギャラリー

「大阪港開港 150 年 水と陸が出会う場所
-安治川･天保山･築港-」
5/1(月)～7/31(月)

大阪港開港 150 年を記念して、江戸期から明治期にかけての安治川や天保山、築港を通して見えてくる水都大阪の姿を当館所蔵の資料でご紹介します。
★大阪市立図書館ホームページにて掲載

3 階ケース展示

「港から見る水都大阪
-大阪港開港 150 年-」
6/16(金)～9/20(水)

大阪港開港 150 年を記念して、大阪港にゆかりのある安治川や天保山、築港について、当館所蔵の資料を展示します。